はばたけ！誠一

もうひとつの次郎物語

禅林 文宏著

八重岳書房

もうひとつの次郎物語

たけ！誠一

文宏

八重岳書房

禅林文宏（帆足文宏）
1943(昭和18)年　大分県玖珠郡に生まれる。
1969(昭和44)年から小学校教師。
現代文芸研究所所員。
現住所　東京都多摩市鶴牧5—17—11
電　話　0423(72)0257

はばたけ！誠一

（検印省略）　定価一〇〇〇円

昭和六十年二月一日印刷
昭和六十年二月七日発行

著者　禅林文宏
発行者　松田好行
印刷所　株式会社大成舎

発行所　株式会社八重岳書房
〒一六二　東京都新宿区津久戸町一四
電話(〇三)二六八—三五六七
振替　東京七—一九二八一

© 1985 Bunkō Zenrin 0037-337084-8527
乱丁・落丁本はお買い求めの書店または小社にてお取りかえいたします。
ISBN4-89646-084-7 C0037

はじめに

人間は誕生したその瞬間から、いくつもの目、いくつもの手に見守られながら成長していく。どれだけの人とのかかわりの中で大きくなることか、数えきれるものではない。

人は一人では決して生きられない。多くの人々のぬくもりに支えられ、便利な物にも助けられ、生かされ、生きているのだと思う。

私は特に、人々の支柱にもたれて、支えられて生きてきたという念を強く持っている。

四十路に入った今、物心に恵まれ、人々に囲まれた自分を、あらためて振り返ってみようと思った。

いつも正面を向いて、定位置にある、座りここちのよい回転椅子を思い切り動かし、出生地である玖珠(くす)盆地のまん中に自分を置くことからはじめた。

誠一を主人公にして、自分がどのように生かされてきたかを書きつづってみた。

この回想をとおして、手をさしのべてくださった多くの方々に、感謝の念を新たにしたいと考えた。

そして、今後も初心を全うできるよう、ときどき立ち止まって反省をし、今、自分でやるべきことは何か、やれることは何かを思考しながら前進するための、思索の書にしたいと考えている。

ここでは、父の仕事を手伝いながら家事をもし、そんな生活の中で友達とどろまみれになって遊びまわる子供期。禅寺に入り厳しい作務（さむ）の合い間に勉強に励む少年期。この二つを回想してみた。

子供は、極めて条件の悪い中でも、一生けん命遊び、厳しい時間制限の中でも、工夫して勉強する能力をもっているものだと思うが、マイコンに向かっている子供が多い昨今、子供の本来の姿とは？　と、考える参考にでもしていただければ、幸いである。

禅林文宏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もくじ——はばたけ！　誠一

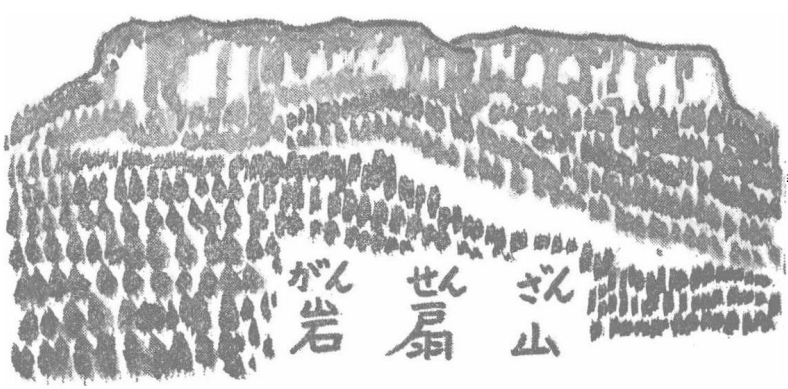
遊びっ子の章

一　皆んな帰らないで　9
二　父の仕事　19
三　お銀ばあちゃんの家　22
四　母の言葉　24
五　了（さとる）との冒険　26
六　お湯の使い方　30
七　離れの活劇　33
八　始兄（はじめ）さんのサイン　41
九　仏壇の母　43
十　アメリカ兵のおみやげ　45

十一　くず鉄売り　50
十二　父の怒り　57
十三　お祭りの夜　65
十四　にわか魚屋　75
十五　殿様の墓　85
十六　雨もり　95
十七　まじないのおばあさん　99
十八　巣立ち　110

小僧の章

一　入山　113
二　小僧修業　118
三　無学さんに学ぶ　138
四　田おこし　141



五　恐怖の開山堂掃除　151
六　父が来る　159
七　払子がホース　167
八　得度式　169
九　棚経　173
十　初めての枕経　179
十一　卵焼きぜめ　182
十二　もち焼きと竹山火事　186
十三　星祭り　192
十四　さい銭箱の秘密　195
十五　石工の月秋さん　201
十六　見違えるようになった寺　212
十七　誠一の進む道は　219

はばたけ！　誠一

この小編を、父と無涯虎峰和尚
そして、多くの師に捧ぐ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

遊びっ子の章

一　皆んな帰らないで

お勝手から聞こえてくる薪のはじける音に、誠一はまだ眠り足りない目でぼんやり床から起き上がった。勝手口のそばの戸が一枚開いていて、その間からかまどの薪の燃えるあかりが、ちょろちょろと障子に映えてゆれている。パチッパチッと、火の粉のはじける音が聞こえてきた。

誠一は、目をこすりながら、数年前、親類のお銀ばあちゃんからもらった綿入りのチャンチャンコを着て、足元をふらふらさせながらお勝手の方へ出て行った。そして、

「父ちゃん」

と、甘ったれた声で父を呼んだ。

「ああ、誠ちゃん起きたかえ、こっちへおいで」

父の声がいつもと変わりなく返ってきた。

誠一は、半開きの戸に沿って大きな杉げたをつっかけると、ご飯炊きしている父のそばへ寄って行った。二人座ればいっぱいの狭いお勝手で、猫がじゃれるように、誠一は父にこすり寄った。そして、父と並んでかまどの前に腰をおろした。

勢いよくはじけて燃える薪やまっ黒くなったかまどの底にくっついた火の子の点滅を見ながら、

「父ちゃん、ちっとさみいばい」

と、誠一は体をもっとすり寄せて言った。

でも、どうしたことか、父は返事をしなかった。露玉のような目に炎の色を映しながら、両手でひげの頬をなぜ回わすしぐさを見て、まだ六歳の誠一にも父の様子がちょっとおかしいと感じた。

〈父ちゃんは、ゆうべ八幡村に行っち仕事をしち来たから疲れているんかな。それとも何か困っちいるんかな〉

誠一は、土間の扉のすき間から入ってくる寒気をさけるように背を丸め、薪が燃えつきていく様子を見ながらそう思った。

誠一は、父がいつも朝食の準備をすることについては何の不思議も感じていなかった。というのは、誠一がもの心ついたときから、ずっと母は病床にあったからだ。

母に相手になってもらうこともなかったし、言葉を交わす機会も少なかった。だから家事はすべて父がするものだと思っていた。

誠一の考えることといえば、父の留守中ぐらいは、自分で食事の準備をしようということだった。また父にもそのように言いつけられていた。

よく乾ききった杉の薪が燃えさかる様子を見ているうちに、かまのふたの間から湯気が四方に走り、ふたが勢いよく横にずれた。

「さあ、ご飯ができちょるよ」

父は、細長い薪二本を残してあとは火箸でそっと引き出し、隣のかまどに移して消しながら言った。

それから、厚いかまの木ぶたを元どおりに直した。大きなブクブク泡が小さくしぼみ、ふたとかまの間に吸いこまれていく様子をながめながら、父は、

「はい、ご飯はこれじできたばい」

と、かすれ声で言った。そしてすぐに、

「誠ちゃん母ちゃんのそばに行っち『母ちゃん』と、大きい声で呼んじごらん」

父は、深刻な顔つきをして低い声で誠一に言った。誠一は、一瞬奇妙に感じた。父は、今まで誠一の前で母親に関して話すことなど一度もなかったからだ。だが、誠一は言われるままに母の寝床

のそばへ近づいた。

よく冷えた朝で、雨戸のすき間からうっすらと弱々しい光がさし込んでいた。

誠一は、母の布団のそばで、ちょっと大きめな声で、

「母ちゃん、父ちゃんが呼んじょるよ。母ちゃん、母ちゃん」

だが、母はよく眠っていて、返事はなかった。顔は白くお化粧したようだった。

〈母ちゃん、どうして起きないのかなぁ。……。きっと病気だから返事できないんだ〉

と、思った。誠一は、いつもよりきれいな寝顔の母をじっと見つめ続けた。

そのとき、父が雨戸を開け始めた。

「誠ちゃん。母ちゃんと話をしちょいちな。父ちゃんは、お銀ばあちゃんを呼んじくるから」

と、あわただしく出かけて行った。

お銀ばあちゃんは、この地域の顔役で、これまで三〇〇〇人近くの赤ちゃんの誕生に立ち合った産婆さんである。誠一にとっては、生まれてからこれまで何くれとなく世話をしてくれた伯母さんでもある。季節の変わりめには必ずといっていいほど扁桃腺を腫らし大熱をだしてうなされる誠一を一晩中看病してくれたのも、お銀ばあちゃんである。八十とは思えないほどつやつやした膚の、大柄でどっしりとした姿は、観音様のように見える。

父は、そのお銀ばあちゃんに何事も相談相手になってもらっていた。

誠一は、父が出かけている間、母をたて続けに大声で呼んだ。ちょっとでも間をおくと家の中がいやにシーンと静まりかえり不安を覚えた。そして、母のそばから後ずさりしながら、いつの間にか土間におりた誠一は、障子のさんを握りしめながら、震える声で、

「母ちゃん、母ちゃん、母ちゃん……」

と、叫び続けた。

数分後に、父と一緒に駆けつけたお銀ばあちゃんが、顔をこわばらせて母の眠っている床へ走り寄った。そして、声を震わせ、

「たっちゃん、あんたどうしち誠一を残して行ったんえ。ええ、どうしち……」

と、言った。

「たっちゃーん」

お銀ばあちゃんは、今度は大きな声で叫んだかと思うと、母の胸に顔面をぴったりと押しつけた。そして、

「ウ…ウ…」

と、かすかな泣き声をもらし始めた。そばに座っている父も目を赤くはらしていた。

誠一が今まで見たことのない父の涙だった。誠一は、このとき初めて母の死をはっきりと知った。誠一は、母の病気がそれほど重かったと知らなかっただけに大きなショックだった。

というのも、父はよく「角埋山」という大きな三角山の向こうの村落へ泊まり込みの表具仕事に行った。だが、出かけるに当たって誠一に、

「母ちゃんが大変なんじゃからよう看病をおしよ」

など、まったく言わなかったからである。用事といえば父が作った食事をときどき運ぶだけであった。後は、お銀ばあちゃんが看病してくれた。

お銀ばあちゃんは、顔をまっ青にして誠一を抱きかかえながら十分間ぐらい母の寝床のそばで父と話し、うなずき合っていた。

そのうち、近所の人達があわただしく出入りし始めた。そんな中で裏の家のおじさんが、白い紙を小さくねじって折り、割りばしにのりでくっつけて、夢の国の鳥のような形を四つ作った。誠一もそれを手伝いながら、

「おいちゃん、どうしちこれ四つ作るの」

と、聞くと、

「これはな、東西南北のどこに誠ちゃんのお母ちゃんが行ってもいいように案内しちもらう鳥だよ」

と、やさしく言った。

誠一は、学校で工作の時間にこの鳥を作れるようになろうと一生けん命に、おじさんの手元をの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com